

モデルはロシア人の写真家。印刷会社のご紹介で来店
の折に撮影しました。通訳の方にスタジオの外に出て
いただいて撮影しましたが、写真を撮っている人間同
士のためか、スムーズに撮影することができました。

フィルムにこだわる写真家たち
PHOTOGRAPHERS WHO DEVOTE THEMSELVES TO FILM

フィルムに定着された 画像そのものが基準

Yabuuchi Naoya

(有)矢吹写真館 (北海道稚内市) 矢吹尚也氏



矢吹尚也氏

フィルムからのプリントは「何か」を表現するための手段だ

従来の写真をアナログ写真と呼ぶのか、ということは別として、「デジタル写真」対「アナログ写真」ではどちらが良いのか？という視点で「写真」について考えさせられる機会が多いのですが、最終的な目的が出力されたプリントである場合、モノクロからカラーへという大転換と比較すると、写真そのものの価値観が変わるほどの変化ではないと思います。

プリントを作るために使われるものが、フィルムであれ、デジタルカメラであれ、プリントされた「写真」がその目的にかなう質のものであれば、入力、撮影段階の方法は何であって良いと思います。像を取り込んで、最終的に紙にプリントするという行為そのものは、デジタルになっても何も変化していないし、作る側の心理や動機には関係してくるでしょうが、その影響は写真の内容そのものには届かないと思います。

メロディーが完成されていれば、アコースティックギターで弾いても、エレキギターで弾いても、メロディーそのものは同じであることにも似ていると思います。

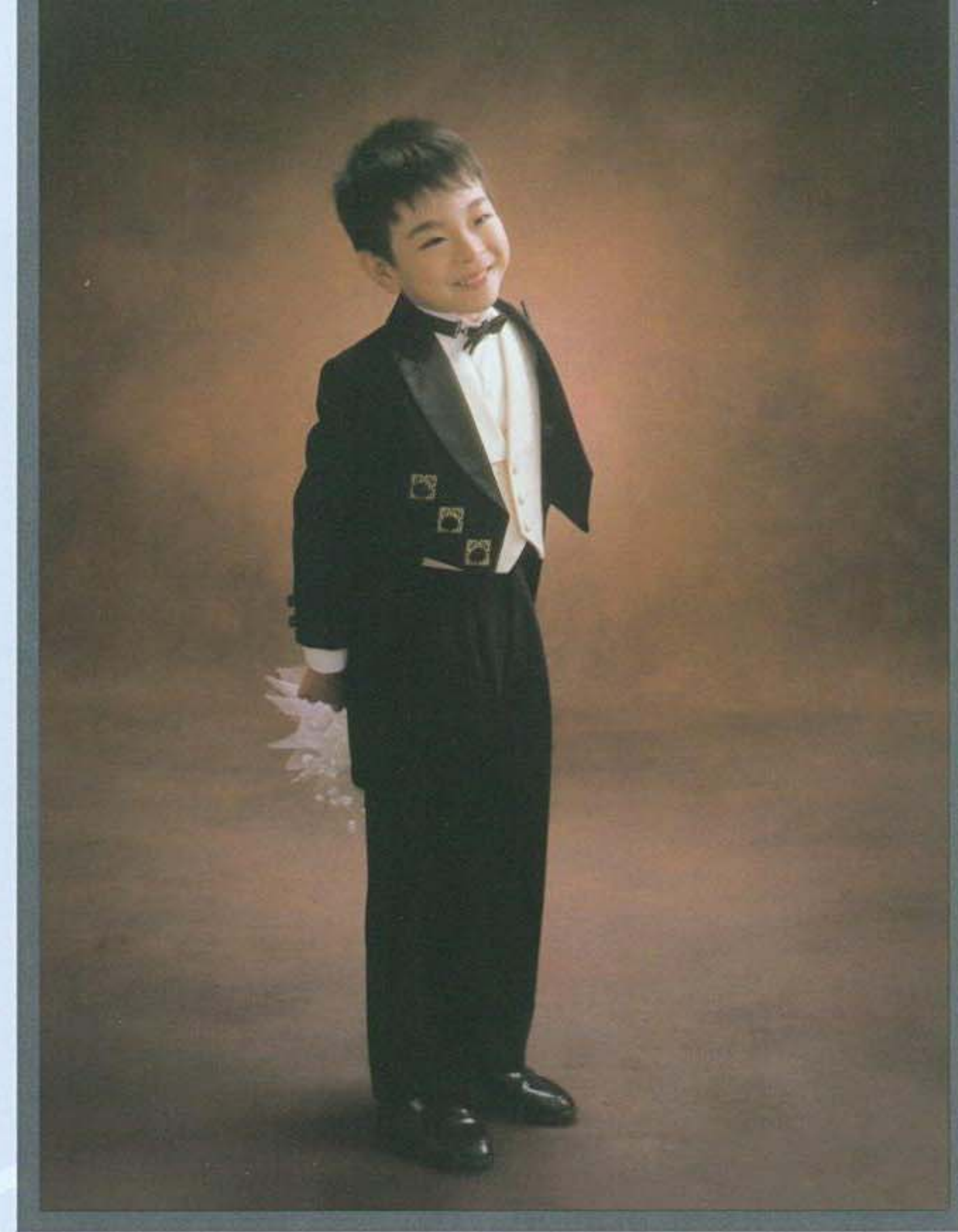
プリントが目的の場合、デジタルとフィルムで質的に差が出ることはあっても、目的によっては問題にならない程度のものであることも可能であるにもかかわらず、なぜ利便性の良いデジタルを現



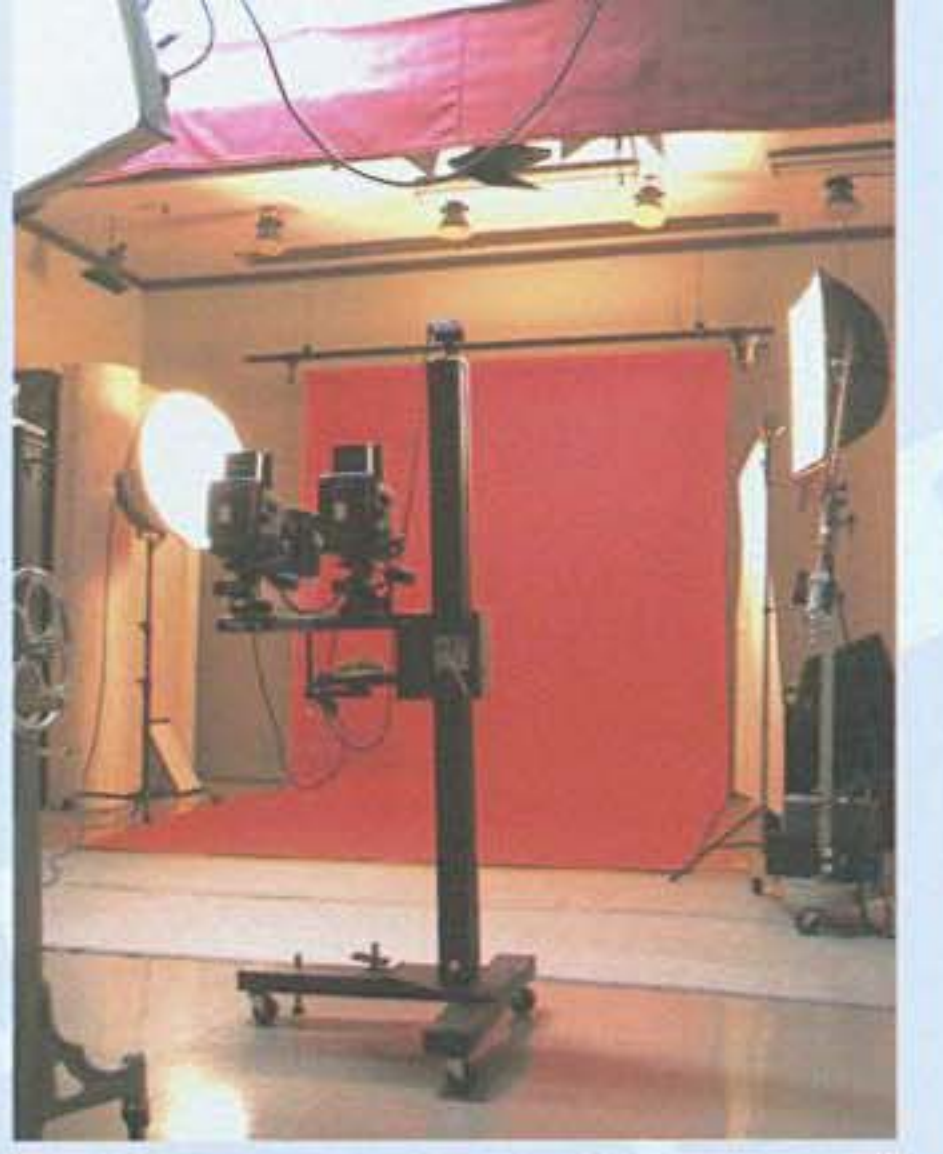
【左】店舗への入り口正面。お店に入って右側の階段を上げると、写場のフロアに。壁には折々の写真を展示。お客様はそれぞれの写真に足を止めて和やかにおしゃべりをされながら階段を上がります。
【右】正面店舗デザイン。現役を退いたアンソニーを玄関脇に置いているので、ご来店のお客様との会話の一部になっています。小さいお子様もファインダーに映るさかさまの文字に（ファインダーには店名のロゴが映ります）興味をもって見てくれます。



1歳のお誕生日で、男の子はかなり緊張気味だったので、お父さんをお願いして「高い高い」をしていただきましたが、だんだんエスカレートしてジャンプになってしまいました。



最近の七五三ではほとんどの男の子がタキシードでの撮影になりますが、最初は照れていても、鏡で自分のタキシード姿を見ると、プリプリになってくれます。



【上】スタジオの内部。築40年近い古い写場です
【下】2F受付フロア。右手奥が衣装室

状ではメインで使わないかというと、プリントの良否以前の、撮影時での意識の違いがあるからだと思います。

フィルムに定着された画像そのものが基準となるものであり、撮影時にこのフィルムにはこう定着される、と確信を持つことができ、フィルムに定着された画像そのものが、プリントに至る流れの中でも、その本質は変えることが出来ない撮影の時点での一回性、記録としての写真の重要性を感じさせるからだと思います。

フィルムがそうであったように、記録メディアは進化し続け、デジタルでの写真が主流となるでしょうが、言葉や文字が意志を伝えるだけの道具から、演劇や文学になり、映画はテレビが出現したことによって、スピードや利便性を失いましたが、むしろそのことによって芸術性を獲得し、モノクロ写真はカラー写真が出来たことで記録という役割を終えて、表現することがメインとなっていったと思います。

デジタル写真が出来たことによって、スピードや利便性やコスト面などで、カラーフィルムの役割は終わったのかもしれませんが、メディア（伝えること）としての役割を終えたものから表現の方法として成り立つのなら、カラーフィルムからのプリントは、むしろデジタル写真が実用となったことで、「何か」を表現するための手段になったのではないかと思います。

ケータイやデジカメを始めとして、誰にでも簡単に写真を写すことが出来、誰でもが使える文字や言葉と映像が、同じレベルになっている今の状況でこそ、1枚の写真をつくることで何をどのように撮影し表現するのかを、シャッターを切る前に考え、デジタルとフィルムの選択を、何が目的かによって使い分けるとの出来る道具として考え、使っていきたいと思っています。



美容師のヘア・メイクのフォトコンテスト用に美容師さんからの依頼で撮影。